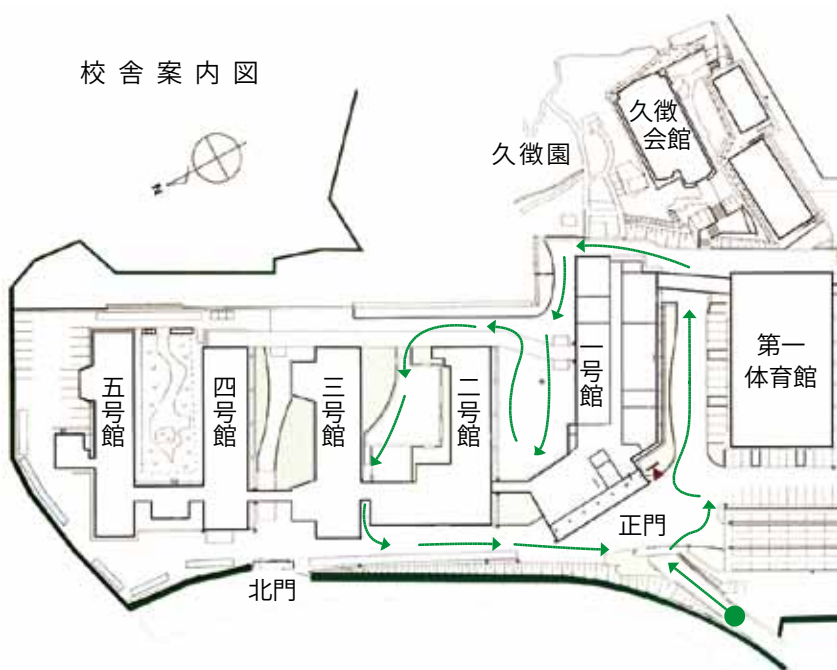


### 3. 校舎間 Aコース



校舎間 Aコースは、正門から始まります。正門周辺にはヒメコマツやソテツ、クロマツがあり、1号館と第一体育館の間を抜けていきます。1-2号館中庭にある裸子植物園には、平田駒太郎先生お手植の樹木が大きく育っています。そして、以前はプールのあった3-4号館の中庭を抜け、正門に戻ってくるコースとなっています。

ヤマオダマキ / アヤメ / ソテツ / モッコウバラ / フキノトウ / 紅葉 / サルスベリ / バショウ / ツワブキ / ヤマボウシ / オトギリソウ / ヘクソカズラ





### ソテツ (ソテツ科 花期/7～8月 結実期/11～12月)

九州南部から沖縄の海岸の断崖に自生します。「蘇鉄」は牧野博士によると、衰弱したソテツに鉄くずを肥料として与えると蘇るとのいわれに基づいています。ソテツはイチョウと共に裸子植物の中でも最も祖先に近い種類です。雌雄異株で、7～8月頃、それぞれの茎頂に雌花と雄花を咲かせます。雄花は円柱状に直立するので雌花とは容易に区別できます。花粉は発芽すると精子を出します。(ソテツの精子は、1896年に池野成一郎によって発見されたのは世界的に有名。イチョウの精子は、1896年に平瀬作五郎によって発見)11～12月には朱赤色の卵形の果実を結実します。幹全面に葉の落ちた跡が菱形状に残ってるのも特徴の一つです。大社町日御碕の福性寺の大ソテツは雄株で、根回り4m、高さ4mもあり国の天然記念物に指定されています。



ソテツ



花蘇鉄海は遠浅珊瑚礁 (杉 素木)

### フジバカマ (キク科 花期/8～9月)

キク科ヒヨドリバナ属の一種で、秋の七草の一つです。生け花や香気があるのでお風呂に入れたりします。奈良時代に中国から渡来し、庭にあったものが土手などに野生化していると考えられています。島根県では野生化したものは確認されていません。フジバカマは「藤袴」で、古くは花の色が藤色の袴に似ているからとされています。他にも、花が藤色で葉の基部に袴を履いたような切れ込み葉があるからという人もいますが、真偽の程は定かではありません。



フジバカマ



## 大正天皇お手植えの松

大正天皇が皇太子の頃の明治40年(1907年)5月、東郷平八郎大将と共に平田植物園を訪れた時に記念植樹されたというお手植えの松です。2006年(平成18年)の出雲高校新改築によって、1号館の前にあったものを正門左に移植しました。慎重に移植されましたが、夏の暑さで平成26年に枯死してしまいました。幸いに、このお手植えの松の種子から芽生えた2世が正門左に2株植えられています。既に3m位に成長しています。枯死した大正天皇お手植えの松は大切に保管され、出雲高校創立百周年の記念モニュメントとして玄関に展示されることになりました。



改築前の大正天皇お手植えの松



移植後の大正天皇お手植えの松



大正天皇お手植えの松 二世

### ヒメコマツ (マツ科 花期/5～6月 結実期/翌10月)

ヒメコマツは、別名ゴヨウマツ「五葉松」です。ゴヨウマツというとなんとなく庭木や盆栽を想像しますが、東北東南部から九州までの山地に自生しており直径1mにもなるといいます。ヒメコマツの変種・キタゴヨウが中部地方以北の高山帯に分布しています。ゴヨウマツの葉は端枝に5本ずつ(5束生)つきます。クロマツやアカマツは、2本が束(2束生)になっています。ヒメコマツの葉は、長さ2～6cmでややねじれます。断面は三角形です。球果は長さ4～7cmで、種鱗はキタゴヨウほどには反り返りません。



クロマツ アカマツ ヒメコマツ



ヒメコマツ

### カラタチ （ミカン科 花期/4～5月 結実期/10～11月）

古い時代に中国中部の原産地から渡来したもので「唐橘」です。枝に稜があり、4～5cmの扁平な鋭い刺に触ると、ギ酸が皮膚にしみ込みヒリヒリと痛みます。葉は3出複葉で葉柄に翼があります。4～5月頃、葉の出る前に白い花をつけ、10月に直径3～5cmのピンポン玉大の果実をつけ、黄色に熟します。カラタチというと、北原白秋作詞、山田耕筈作曲の「からたちの花」を思い出します。北原白秋は福岡県柳川に生まれ、18歳まで柳川で育ちました。当時の柳川はカラタチの垣根が多くあり、白秋はよく講演の冒頭で「からたちの花」を柳川方言で紹介されたということです。それはこういう具合です。「ゲーズゲーズノ花ンセータバン、シーロカ花ン、セータバン・・・」。九州地方で「ゲーズ」というのはカラタチのことで、「下等な酢」という意味だそうです。北原白秋の「カラタチの花」は、カラタチの特徴を見事に表現している詩です。今は、コンクリートブロックで垣を巡らすことが多くなりましたが、庭の植物は風が通らないと育ちません。その点、カラタチなどで生垣をめぐらすと庭の植物がニコニコとしています。

からたちの棘にくけれど花やさし （高原君子）



カラタチの果実



カラタチの花

からたちの花

北原白秋  
山田耕筈 作詞  
作曲

からたちの花が咲いたよ  
白い花が咲いたよ  
からたちのとげはいたいよ  
青い針のとげだよ  
からたちは畑の垣根よ  
いつもいつもとおる道だよ  
からたちも秋は実るよ  
まろいまろい金のたまだよ  
からたちの花のそばで泣いたよ  
みんなみんなやさしかったよ  
からたちの花が咲いたよ

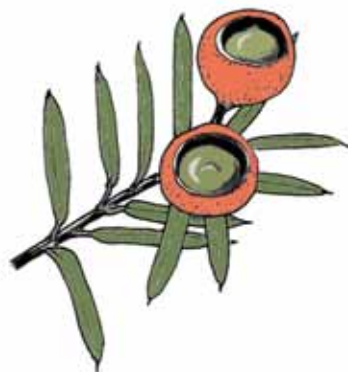


**イチイ（イチイ科 花期/3～4月 結実期/9～10月）**

イチイは「一位」で神官が持つ<sup>しやく</sup>笏の材として用い、一位の位にちなんでイチイの名がつけました。別名アララギともいいます。イチイは葉が2列に並ぶ性質があります。（イチイの変種キャラボクはやや輪生状に不規則に並ぶ）赤い果実は、先端が開いており、中の種子が覗けます。種子は有毒です。船通山の頂上近くのイチイの巨木は、樹齢2000年ともいわれ、鳥取県の天然記念物に指定されています。また、仁多郡奥出雲町大馬木にあるキャラボクは高さ8m、胸高囲3.2m、枝張り約30mになる県下随一の巨木で、島根県の天然記念物に指定されています。



笏



イチイの実

**キャラボク（イチイ科 花期/3～5月）**

キャラボクは、イチイの変種 (var.) で高さ1～2mになります。大山などの日本海側の高山や深山に自生します。特に、大山の8～9合目付近のものをダイセンキャラボクといい、国の天然記念物に指定されています。イチイやキャラボクの赤い実の中の種子は有毒で、4～5粒で致死量に達するといわれています。赤い部分（仮種皮とよばれる）の下から、中の種子が見えるのは裸子植物の特徴です。



キャラボクの実

**イヌマキ（マキ科 花期/5～6月 結実期/9～10月）**

暖地の山地に自生する木で大木になり得るので将来はこのあたりにそびえることになるかも知れません。建築材にしたり、庭木として植えることも多くあります。これも雌雄異株です。戦後のおやつのない時期が私達の子供時代でした。否応なく自然の中におやつを求めました。その一つがこのイヌマキやヤマモモの実です。9月頃、家の生垣に植えてあるイヌマキに赤い実がなります。先端に緑色で食べられない丸い部分（種子）があってこれをプツと吐き出して、赤くて柔らかい果肉（花托といいます）の部分を食べます。子どもの小さい体で大きなイヌマキの樹に登って赤い実を探して食べた懐かしい記憶を思い起こします。ラカンマキ（5～6月、9～10月）はイヌマキより葉が短く、幅も狭く、全体が白っぽく見えます。生垣や庭木としてよく植えられています。生け花材料に使うチョウセンマキは、マキといってもイヌガヤ科の別種で、直立性で葉が螺旋状につくのが特徴です。



イヌマキの実

## ・カシの類

(ブナ科、4～5月)

カシ類は照葉樹林の代表的な樹種で、堅い木という和字「榎」をつくりカシと読ませました。カシ類の見分け方はなかなか難しいものです。たいてい葉の形と果実(ドングリ)の形で見分けます。一般



的なカシのなかまを図示しますので実物と照らし合わせて見比べてみてください。ここに挙げるカシ類のドングリのお皿(殻斗<sup>かくと</sup>とといいます)には6～8本の横輪があるのが特徴です。他のドングリ類については、p.28を参照してください。この4種類の葉やドングリは、どのブナ科の樹木でしょうか。実物と照らし合わせて見比べてみましょう。(答えはp.99。)

### アラカシ (ブナ科 結実期/翌10月)

アラカシ(10～11月)は「粗榎」と書き、枝葉が粗大で堅いからでしょう。葉の縁にあるギザギザ(鋸歯)はおよそ1/2より前半にあります。木炭の材料になります。炭火を起こすことも珍しいことになりましたが、そんな時があったら触れてみると堅い木であることがよく分かるはずです。アラカシやシラカシ、ウラジロガシは常緑で冬でも葉がついていて年中緑色をしているので、ウバメガシとともに生垣や庭木として植えられているのをよく見かけます。



アラカシ

### アカガシ (ブナ科 結実期/翌10月)

葉が革質で乾燥すると赤褐色になります。しかし、「赤榎」の名前の由来は堅い材が赤みを帯びていることによります。葉の鋸歯はほとんどなく全縁です。葉柄がやや長いのも特徴でしょうか。



アカガシの葉と実

### シラカシ (ブナ科 結実期/10～11月)

葉の裏が緑白色であるのが特徴で、鋸歯は2/3から3/4以上にあり、この4種ではもっとも鋸歯が多くある傾向にあります。名前の「白榎」は材がアカガシに比べて白っぽいことによります。分布はウラジロガシと同様の地域で普通に見られます。シラカシは万葉集でも「白榎<sup>しらかし</sup>」です。

あしひきの山道も知らず白榎の枝もとををに雪の降れば  
(「万葉集」巻10-2315 柿本人麻呂)







元校舎/ 昭和31年(1956年)頃



前校舎/ 昭和47年(1972年)頃



現在の校舎/ 平成31年(2019年)

## イチョウ (イチョウ科 花期/4～5月 結実期/10～11月)

「金色の小さき鳥の形して銀杏散るなり夕日の丘に(晶子)」のイチョウです。各地の街路樹や庭園に植えられている落葉樹で、大阪御堂筋のイチョウ並木は有名です。「公孫樹」とも書き、古代に中国から渡来したものです。イチョウ科1属1種ですが、中生代ジュラ紀に栄え、それ以降化石として17属が確認されています。丈夫で長命なので樹齢1,000年を越す老樹や巨木が随所にあります。老木になると「乳」と呼ばれる気根の一種がぶら下がります。燃えにくいということで、隣家との境界に植えておくといいますが、雌雄異株で、雌株を植えると特にあのギンナン(中国語で「銀杏」)の臭いはいくらもいただけません。イチョウの語源は「鴨脚」の宋時代の音読みヤーチャオの転訛という説もあります。葉の上に果実をつけるものを「お葉つきイチョウ」といいます。また、乳状の突起を下垂するものを乳房イチョウといい、大社町の奉納山入口にあります。さらに、葉が筒状に巻いた「ラッパイチョウ」なるものが大社町の知西寺にあります。イチョウはソテツとともに裸子植物では精子をつくります。(1896年、平瀬作五郎によって発見され世界的に有名になりました)

北は黄に銀杏ぞ見ゆる大徳寺 (召波)



イチョウの精子



旧図書館横のイチョウ

## ～イチョウの黄葉はどうして起こるのか？～

**コラム** イチョウなどの葉が切り落とされる部分は決まっており、ここを離層という。次第に気温や日照が低下してくると、離層が発達して水分や養分の通過ができなくなる。すると、低温や水不足で葉の中のクロロフィル(葉緑素)が分解をはじめ、分解しない黄色のキサントフィル系の色素だけが残って葉全体が黄色を呈するようになる。これが黄葉になる仕組みだ。黄葉の例としては、イチョウの他に、イタヤカエデ、ポプラ、タカノツメ、コシアブラなどがある。山一面の紅葉の中にポカッと黄葉が混ざり、また鮮やかに映えてすばらしい景色を演出する。仁多郡奥出雲町の金言寺の大イチョウは、田んぼに映る「逆さ大イチョウ」として有名だ。



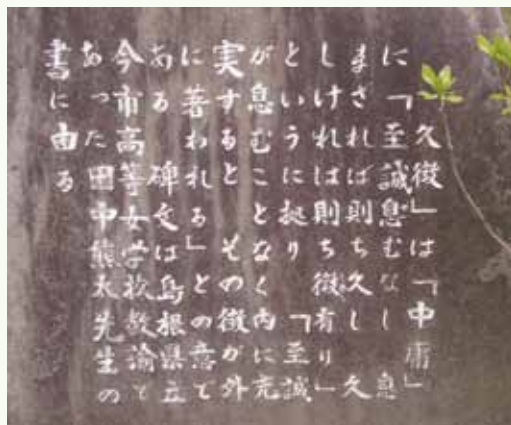
## 「久徴」の碑文について

石碑の碑文には、こう書かれています。「至誠無息不息則久、則有徴」。

説明の碑文は、「久徴」は「中庸」に「至誠<sup>や</sup>息むなし 息まざれば則ち久し 久しければ則ち徴<sup>しるし</sup>有り」というに拠り「至誠が息むことなく内に充実すると その徴が外に著われる」との意である 碑文は島根県立今市高等学校教諭であった田中熊太先生の書に由る、とあります。



「久徴」の碑文



「久徴」の説明の碑文

**ゲッケイジュ** （クスノキ科 花期/4～5月 結実期/10月）

気候温暖で夏の雨量の少ない地中海性気候に発達する硬葉樹林を代表する樹木です。古代オリンピックでは都市国家の名誉をかけて、唯一この木で作った月桂冠を頭にいただくことのみを目標にスポーツ競技に命をかけました。今日でも、大きなマラソン大会の優勝者には月桂冠をかぶせます。葉にも果実にも芳香があり、ベイ・リーフとかローリエといって肉料理などの香辛料として用いられます。雌雄異株ですが日本には雌株は少ししかありません。もし雌株があれば10月頃に実がなります。



ゲッケイジュ

答え A. アカガシ B. アラカシ C. シラカシ D. ウラジロガシ



**ヒオウギ**（アヤメ科 花期/8～9月 結実期/10月～）

山地の草原に生える多年草です。緋色の花が咲き、葉が平面的に左右に出る姿が扇に似ているというのでヒオウギといいます。8～9月に直径3～4cmの橙色で内面に濃赤色の斑点がある花を咲かせます。花後、真っ黒い実を付け、「ぬばたま」「うばたま」と呼ばれて古来より「夜」「黒」に掛かる枕詞となっています。

ぬばたまの夜の更けゆけば久木生ふる清き川原に千鳥しば鳴く（「万葉集」巻6-925 山部赤人）

ぬばたまの夜さり来れば巻向の川音高しも嵐かも疾き（「万葉集」巻7-1101 柿本人麻呂）



ヒオウギ

**ギョリュウ**（ギョリュウ科 花期/5.9月 結実期/10月）

漢名は「御柳」です。寛保年間（1740年頃）に原産地中国から波来したものです。枝は細かく枝分かれして葉は針状、冬になると黄色くなって落葉します。5月と9月の年2回、総状花序（アブラナ、フジなどの花のように主軸からたくさんの小枝を出し元から先端へと咲く花序）に紅色の小さな多数の花をつけます。夏の花は結実して冠毛のある小種子を飛ばします。花材としても使われます。



ギョリュウ

**ハナカイドウ**（バラ科 花期/4～5月 結実期/10～11月）

「花海棠」ですが単にカイドウとも呼びます。原産地中国ではボタンに次いで愛好され、昔から美人を讃えるのに引き合いに出されるそうです。属名はリンゴ（Malus）属といい、ギリシャ語の Malos（リンゴ）からきたものです。枝には刺があります。4月、枝先に紅色半八重～一重の花を下垂して奇麗です。（別種のミカイドウは花柄が短く、5弁で色は淡く、やや上向きに咲きます）実は少ないですが、8～9mmの楕円形で暗紅褐色先端に萼の跡が残っています。九州の霧島山えびの高原にはノカイドウが自生していて国の天然記念物に指定されています。



ハナカイドウ

海棠の影さす扱は夕月夜（高井几董）

## シモクレン (モクレン科 花期/4～5月)

少し暖かくなった春に大きな紫色の花を上向きに半開きにつけ、シモクレン(紫木蓮)といえます。モクレンは、春の暖かい陽ざしを南から受けて蕾の南側が良く生長して膨れるため、先端が北側を指します。そこで、指示植物とか、コンパスプラント、磁石の木などといわれています。タムシバ、コブシなどのモクレン科やヤナギ科に見られる特徴です。春先に、これらの蕾を見ると山中で方角を知る一つの手がかりになります。



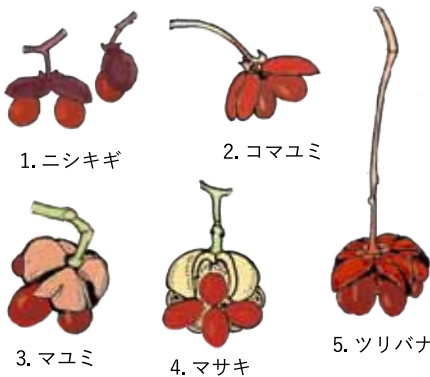
シモクレン

紫木蓮仏の指の反りに似て (宮原栄子)

## ニシキギ (ニシキギ科 花期/5～6月 結実期/10～11月)

紅葉が美しいので「錦木」といいます。枝にコルク質の翼ができます。この翼が発達しないものもあり、それをコマユミ(5～6月、10～11月)といえます。マユミ、マサキ、ツリバナも同じ仲間です。実がはじけて赤い実が顔を出すと誠にかわいらしいものです。

袖ふれて錦木紅こぼれけり (風生)



◎ 図は、5種の実が裂開した状態を示しています。

1. ニシキギ / 1～2分果に各1個の種子を出す。
2. コマユミ / 1～2(4)分果して各1個の種子を出す。
3. マユミ (5～6月、10～11月) / 4裂して4種子を出す。
4. マサキ (6～7月、12～翌2月) / 3～4裂して4種子を出す。
5. ツリバナ (5～6月、9～10月) / 5裂して、5種子を出し、長い柄でぶら下がる。

## ボダイジュ (アオイ科 花期/6～7月 結実期/9～11月)

お釈迦様がこの樹の下で悟りを開いたとされる菩提樹は、クワ科の別の植物でインドボダイジュ(沙羅双樹)といえます。ボダイジュ(菩提樹)は、中国原産で臨済宗の開祖栄西が中国から持ち帰り、仏教寺院によく植えられています。日本の中部以北にはオオバボダイジュが生えています。また、シナノキ、ヘラノキも同じ仲間ですが、果柄のつく苞の柄がボダイジュより長いのが区別点の一つです。シューベルトの歌曲・菩提樹(Lindenbaum)はセイヨウシナノキです。

菩提樹の実の垂れ日ざしまんだらよ (大野林火)



ボダイジュ



## 島根県女子師範学校跡碑と平田植物園碑

1号館南側に2つの記念碑が建っています。一つは「島根県女子師範学校跡碑」、もう一つは「平田植物園碑」です。島根県立出雲高等学校の前身である島根県女子師範学校は明治36年6月に鷹の澤に校舎が移転され、大正12年に浜田町に移転されました。その後、今市高等女学校として独立。昭和23年4月から島根県立出雲高等学校が発足し、現在に至っています。ハナカイドウ、シモクレン、ニシキギ、ボダイジュ、ロウバイがここにはあり、保健室の前あたりに平田植物園碑が建っています。（題字は当時の福邑正樹知事による）



島根県女子師範学校跡碑/昭和54年(1979年)建立



平田植物園碑/昭和9年(1934年)建立

### ロウバイ（ロウバイ科 花期/2～3月）

江戸時代の初期に中国から日本にやって来たものです。「蠟梅」と書きますが、いくつか重なった花弁が蠟のようにカサカサとして堅く、梅の花に似ていることからついた名前です。久徴園内にあるクロバナロウバイは黒っぽい花を咲かせますが、こちらは綺麗な黄色の花です。よく見ると花の中心には、えんじ色の小さな花弁がいくつかあります。この中心の花弁も黄色のものをソシンロウバイ（素心蠟梅）といいます。2月頃、葉に先立って花をつけ、花のない時期に咲く貴重な茶花として珍重されます。なんとなく侘しく、ひっそりと咲く姿は茶人の心を惹くのでしょう。その花言葉も「枯淡」「慈愛」です。



ロウバイ

### マンサク（マンサク科 花期/3～4月 結実期/9～10月）

山地の林内に生える落葉低木で、3～4月に葉が出る前に黄色の花が数個ずつ集まって咲きます。枝に沢山付くので、春の枯れ木の多い山中でよく目立ちます。一個の花は4枚の細長い花弁を伸ばし、その付け根の萼は暗赤色です。マンサクの呼び名は、枝いっぱい咲くので「萬作」、春真っ先に咲くので、「先ず咲く」が訛って「マンサク」になったという説もあります。庭園樹として植えられるものに花色が黄色や朱色のシナマンサク、常緑のトキワマンサク等があります。



マンサク

渡り廊下をくぐり、久徴園入口の前を抜けたところにヒトツバタゴと柳楽茂氏の碑のあるメモリアルゾーンがあります。また、1号館と2号館の間の中庭にある裸子植物園も見えてくるでしょう。ここは、平田駒太郎先生の植えられたものが残っているところです。



## 柳楽茂氏のこと

柳楽茂氏は、昭和28年から50年まで、四半世紀にわたって平田植物園の維持管理と発展のため、献身的に尽力された園丁で、荒廃していた平田植物園を多くの協力者を得て復興し、発展期を作りあげました。その間、植物の管理はいうに及ばず、久徴園を訪れる生徒達に学校教育を超えた幅広い感化を与えました。平成6年に生物部OB会が写真にある標柱を建て、ヒトツバタゴ（ナンジャモンジャ）を植樹し、米寿を祝いました。



ヒトツバタゴ



昭和33年頃の柳楽茂氏



柳楽茂先生記念碑

### ヒトツバタゴ（モクセイ科 花期/5月 結実期/9～10月）

日本では愛知、岐阜、対馬だけに自生する珍木です。昔、明治神宮外苑にあった大木の名前が分からずナンジャモンジャの木と呼ばれていたことから別名をナンジャモンジャの木といいます。松江の城山公園にも植えてあります。新聞には、「島根県では松江城山だけにあります」と載っていましたが、出雲高校にも柳楽茂先生を記念して植えてあります。小さな、比較的地味な純白の花が群れて咲くと美しい樹木です。果実は1cmの楕円形で黒熟します。



ヒトツバタゴの花



**ヤマブキ （バラ科 花期／4～5月 結実期／9月）**

山地の崖から垂れ下がるように生え、落葉する1～2mの低木です。4～5月鮮やかなヤマブキ色の一重5枚花弁で3～4cmの花を咲かせます。中心に雄しべが沢山あります（これはバラ科の特徴）。9月ごろ実が弾けて1～5個の暗褐色の種子を出します。白い花のものをシロバナヤマブキといいます。シロヤマブキ(p.13)は別種です。また、花弁が八重咲きになるものをヤエヤマブキといい、実ができません。太田道灌の故事に出てくる「七重八重 花は咲けども・・・」の山吹はこのヤエヤマブキです。



ヤマブキ

山吹に柳しだるゝ小池かな （正岡子規）

**ネジキ （ツツジ科 花期／5～7月 結実期／9～10月）**

山地に普通に生える7m以下の落葉低木です。この木の幹をよく見てください。縦に筋がありますが、これが上にいくほど回転して捻れるように見えます。そこで「捩木（ネジキ）」と名前が付けられました。また、6月ごろ、一列に並んで下向きに咲く白い花がごはん粒のようなので「飯粒の木」という地方もあります。でも、アセビと近縁で有毒植物です。ヤギが食べて死んだという記録があるそうです。



ネジキ

**ウメモドキ （モチノキ科 花期／6月 結実期／11～3月）**

山地や湿地に生え、高さが3m以下の落葉する低木です。果実が紅梅に似ているからとか、葉や枝振りがウメに似ているから「梅擬き」（ウメモドキ）との説があります。赤い実が枝いっぱいになり美しいので庭木として重宝がられます。あまり知られてはいませんが、6月頃に咲くピンクの小さな花もかわいらしいです。久徴園のウメモドキは、枝が細かく分かれていて、秋から冬にかけて赤い小さな実をビッシリとつけますので実にきれいです。竹笹園のうしろにも生えています。



ウメモドキ

梅の木に見せびらかすや梅もどき （小林一茶）  
赤き実のこぼるる惜しみ梅もどき （坂 正恵）

## ウメ（バラ科 花期/1～3月 結実期/5～6月）

ウメモドキと並んで古木の梅があります。紅梅です。ウメは「烏梅」からの、中国語のムイまたはメイからの、朝鮮語のマイからなどの転訛したものとの諸説があります。ウメの学名は *Armeniaca mume* de Vriese といいますが、この種小名の *mume* はウメの古名ムメからつけられたものです。（下コラム参照）紅梅は勿論園芸種、改良種ですが花の赤いのもさることながら、枝も赤味を帯びており、枝の髄を折ってみると中が赤いという特徴もあります。



ウメ

梅一輪一りんほどのあたたかさ （服部嵐雪）

へつらはぬ枝の強さよ梅の花 （勝 海舟）

春さればまづ咲く宿の梅の花ひとり見つや春日暮らさむ（「万葉集」巻5-818 山上憶良）

### ～学名について～

#### コ ラ ム

「名無し草」という言葉を聞くことがあるが、一木一草、雑草の一つ一つに至るまで全てに名前がある。植物によっては、方言も入れると大変な数になる。例えば、イタドリは495、ヒガンバナは410、カタバミには222もあるそうだ。ウメという名称は和名といい、原産地の中国では烏梅、朝鮮ではマイ、英語では *Prum* 等々当然ながら国によって呼び方が異なる。これでは、どの樹を指しているのか迷う。そこで、万国共通の名称が付けられるようになった。これを学名という。

ウメは *Armeniaca mume* de Vriese という。もし、この学名を知っていれば、世界中どこへ行っても通用する。学名は二名法といい、属名 + 種小名で示す。そして、この学名を付けた人の名前、つまり命名者名を最後に付ける。ウメの場合、*de Vriese* が命名者だ。次のようになる。

和 名 学 名

ウ メ *Armeniaca mume* de Vriese  
（属名） （種小名） （命名者名）

植物によっては、種の中に亜種や変種、品種もある。その場合は、種名の後に subsp.(亜種)、var.(変種)、forma.(品種)、cv.(園芸品種) などをつけて3つ目の名称を書く。ウメの変種のコウメは次のように書く。

コウメ *Armeniaca mume* var. *Microcarpa* (小さい果実の) (命名者名省略)

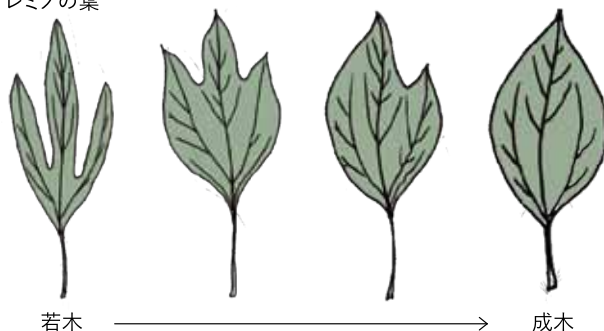
最近では、園芸ブームで多くの園芸植物が出廻っており、属名がそのまま使われているものもある。クレマチス（センニンソウ属）、アイリス（イリス、アヤメ属）、プリムラ（サクラソウ属）と属名の花盛りだ。プリムラに至っては、*Primula polyantha* とフルネームで出ている。学名は少し難しいが、覚えておくと何かと役に立つことがあるだろう。



カクレミノ (ウコギ科 花期/6～7月 結実期/11～12月)

海岸地方に多いといいますが、この辺では山に普通に生えている常緑の樹で、5～7mになる低木です。沢山の葉をつけるので、着ると姿を隠せるという天狗の「隠れ蓑」に見立てたという説や、葉の形が蓑に似ているからという説もあります。葉に特長があり、若い木では深く3～5裂し、成木では楕円形となるので別種のようにも見えます(上図参照)。

カクレミノの葉



成長すると人生のように丸くなるというので、「カクレミノ人生」なんていうこともできます。青々としているので、よく庭木にされます。秋から冬にヤツデの実に似た黒い果実をつけます。

## コラム

### ～オオサンショウウオのこと～

オオサンショウウオは、地域を指定しない国の特別天然記念物だ。オオサンショウウオは日本特産で、中国山地に多く棲息する。安来市広瀬町西谷地区は、西谷川オオサンショウウオ繁殖地として県自然環境保全地域に指定されている。本校は、特別に許可を得て飼育を認められ、昭和30年代から飼われ始めた。かつては、暗いコンクリート水槽の片隅で横たわる3匹のオオサンショウウオを見ることができ、生物部サンショウウオ班が生きた餌を与えるなど大切に育てていた。(平成22年8月11日に最後の1匹が亡くなってしまった。)

夜間に餌を求め活動し、寿命は人間と同じ80年位は生きるといわれている。もっとも、標本では推定200年という記録もある。半分に切っても生きているので「ハンザキ」とよばれたり、口が半分まで裂けているから「ハンザケ」といった恐ろしい名前では呼ばれるが、ほんとうはとても優しい動物だ。邑智郡邑智町上亀谷の「ハンザケ自然館」や「宍道湖自然館ゴビウス」でも見ることができるので、訪ねてみると良いだろう。



在りし日のオオサンショウウオ

## 平田駒太郎記念庭園

1号館と2号館の中庭にある針葉樹の中には平田先生自らの植林によるものが数多く残っています。新校舎改築以前まではメタセコイア、ヒマラヤシーダー、アマミゴヨウ、カイズカイブキ、エンピツビャクシン、ダイオウショウ、フランスカイガンショウ、ラクウショウ、テーダマツ、リキダマツなどがありました。おそらく、平田先生はここを裸子植物園として想定されていたのでしょう。一世紀を経た今日まで出雲高校の歴史を見続けてきました。リキダマツは池の上に大きく覆い被さって沢山の松かさをつけていましたが、倒木の危険から伐採されました。新改築時には、やむなくフランスカイガンショウ、メタセコイア、ヒマラヤシーダー、アマミゴヨウなども伐採されました。創立百周年の令和2年(2020年)には、大きくなったダイオウショウ、テーダマツ、ラクウショウの芯止めを行い、新たに紹介看板が設置されました。では、今も残っている一つ一つを見ていきましょう。



昭和50年代の裸子植物園



現在の裸子植物園

### ダイオウショウ (マツ科 花期/4月 結実期/翌10月)

「大王松」と書きます。北米東南部原産です。葉は老木では20～30cmにしかありませんが、幼木では40～60cmにもなり、3束生(1カ所から3本のマツ葉が出る)、密生して垂れ下がり、マツの中で最も葉の長いマツです。従って、この木は大きい老木にこだわらなくとも、葉のダイナミックさならば若い木を植えたほうがよいでしょう。球果(マツボックリ)も15～25cmと非常に大きくなります。3束生からなる落ち葉が樹下や鯉の池に多量に落ち込んでいます。



ダイオウショウの葉と球果



## テーダマツ (マツ科 花期/不明)

属名の Taeda(テーダ)という学名にマツをつけて「テーダマツ」です。古い文献ではタエダマツとも。廊下からも見えるよう大形の名札がついています。アメリカ東海岸地方に主に産する雌雄同株の常緑高木で、30m 前後の高さまで成長します。(中には、50m を超えるものもある)おそらく、平田先生お手植えのマツが今も生き残っているのでしょう。

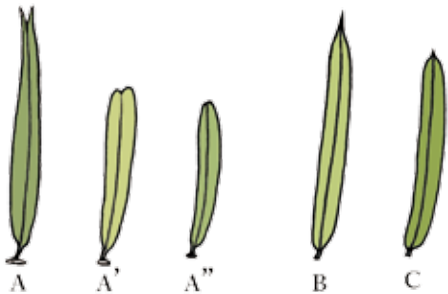
球果(松かさ)は腋生<sup>えきせい</sup>、または梢頂生で6cm 前後のものが多く、やや先端部分が細い円錐形で刺を持ちます。果鱗は成熟すると開き、その後落下します。葉は、日本の種では見られない三出葉(3束生)で、15cm 前後の長さがあり、ときには 20cm を超えます。マツ属の中では、最も湿地を好む種類だそうです。



上から見たテーダマツ

## モミ (マツ科 花期/5月 結実期/10月)

日本特産の針葉樹です。若木の葉は先が尖って二又となっており、このことをツバメの燕尾服になぞらえてツバメモミとも呼びます。モミの若木の葉を間近に観察する機会があれば先端が二裂していることが分かるでしょう。しかし、大木や実を付ける枝では先端は丸味を帯びます。モミと同じような葉をもつカヤの葉は先端が針のように尖っており、痛くて触れませんが、イヌガヤでは同じ針状でも痛くありません。図の A、B、C はどの葉っぱでしょうか。(答えは p.110) クリスマスツリーに使うのはモミですが、若木では確かに円錐形の樹形をしをしています。しかし、更に成長するとかなり丸みを帯びた円錐形となります。古くはモムノキもしくはオミノキといいました。漢字は「樅」です。



モミ

# ドイツトウヒ（マツ科 花期/5月 結実期/9～10月）

ヨーロッパトウヒ、オウシュウトウヒともいい、ヨーロッパ原産です。原産地では70mにも達し、円錐形の樹冠を呈して老木では枝が垂れ下がります。球果はトウヒ属中最大で長さ10～20cm、円柱形でやや下垂します。鳩時計の重りはこの実をかたどったものです。日本の中部の亜高山帯にはトウヒの仲間が自生しています。北米にはコロラドトウヒがあります。ドイツトウヒは日本へは明治中期に渡来し、公園に植えたり北海道では下枝が枯れにくいので防風林や防雪林にしたりします。かの地では建築材や楽器、マッチの軸、パルプ材でもあります。



ドイツトウヒ

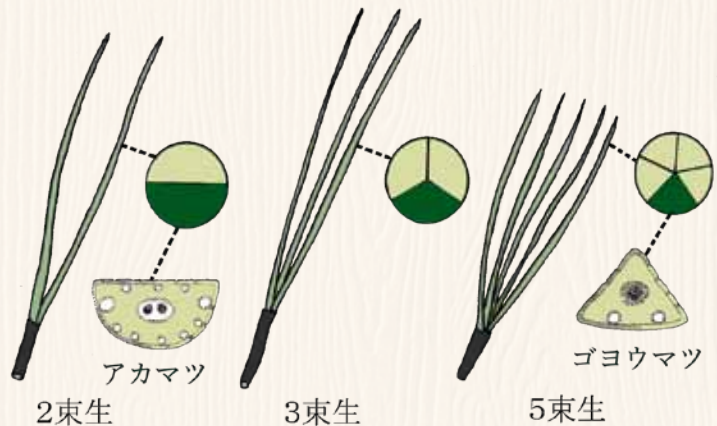
## コラム

### ～マツ葉のおはなし～

マツの類は、枝（長枝）の先端に短枝（図/黒部分）が螺旋状にたくさんつき、その先から針状のマツ葉が数本ずつ束になって出ている。このマツ葉の本数はマツの種類によって決まっている。

2本出るもの（2束生、アカマツなど）、3本出るもの（3束生、サ

ンコノマツ、テーダマツ、リキダマツ、ヒマラヤマツなど）、5本出るもの（5束生、キタゴヨウ、アマミゴヨウ、ハイマツなど）がある。2束生のマツ葉はその断面を見ると、円の半分（180°）、3束生は円の1/3（120°）、5束生は円の1/5（約70°）の扇形の切断面になっている。つまり、1本の丸い枝がそれぞれ2等分、3等分、5等分されて1本のマツ葉ができていくというわけだ。マツ葉を一度じっくりと見てみると面白い。



次の3種のマツは何束生でしょうか。答えはp.111にあります。

A - ダイオウショウ B - クロマツ C - ヒメコマツ



ヒノキ / サワラ (ヒノキ科 花期/4月 結実期/10～11月)

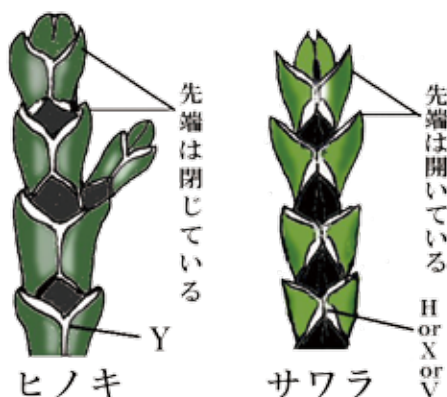
福島県以南に自生、または野生化しています。「火の木」つまり昔の人がこの木をこすり合わせて火を得ていたことによります。スギと共に古くから日本の建築材としてなじみの深いものです。昔から木曽檜は木曽五木の一つとされ、寺社の建築材としました。法隆寺にも檜材が使われています。中国にはヒノキはないので漢字もなく、「檜」という字は中国ではイブキを意味します。

ヒノキ科ヒノキ属には、ヒノキとサワラの2種を含んでいます。両者の区別は葉の先の裏(下図)を見れば分かります。ヒノキの葉は茎に密着して鈍頭、気孔溝という白い部分がY字状になっています。一方、サワラは葉先が茎から離れ鋭く尖っていて、気孔溝はX字状またはV字状になっています。また、果実があれば、サワラの果実は6～7mmと小さくエンドウ豆の大きさと表面がデコボコ状(ヒノキは1cm位)です。両者とも多くの園芸品種があります。

ヒノキの園芸品種にはチャボヒバ(短枝が扇状で重なる)、クジャクヒバ(葉が孔雀羽根状)、オウゴンクジャクヒバ(新芽が黄金色)、サワラにはヒヨクヒバ(枝が垂れ下がる)、シノブヒバ(細葉で先が反り返る)、ヒムロ(葉先が青緑色で柔らかい)、オウゴンシノブヒバなどがあり、庭木や盆栽として植えられています。ヒノキは万葉集では「檜」です。

いにしへにありけむ人も吾が如か三輪の檜原に挿頭折りけむ

(「万葉集」巻7-1118 柿本人麻呂歌集)



アスナロ (ヒノキ科 花期/4～5月 結実期/10月)

日本特産の針葉高木で樹幹は直立しますが、ねじれたり湾曲することが多いです。ヒノキの仲間では葉は厚く、最も大きな鱗状をしており、葉の裏の気孔溝は白くてよく目立ちます。雌雄同株。球果は球形で淡褐色に成熟します。材は建築材、器具材、土木用材などで、材の精油は薬用となります。木は庭園樹、生垣にします。和名のアスナロは「あすはヒノキになろう」からの名前だといわれていますが、実の所はよく分かっていません。



アスナロの葉裏

**イブキ (ヒノキ科 花期/4月 結実期/10月)**

太平洋側の海岸部に自生するといいますが、庭木や公園樹として見ることの多いヒノキ科の樹木です。イブキビャクシン(伊吹柏楨)ともいいます。葉が鱗片状に重なり円柱状になっていますが、刈り込むと針状の葉が出ます。生け垣や庭木としてよく植えられているカイヅカイブキはイブキの園芸品種です。



イブキ

**カイヅカイブキ (ヒノキ科 花期/4月 結実期/9~11月)**

イブキは伊吹地方に多い「伊吹柏楨」の略です。<sup>いぶきびやくしん</sup>海岸などに多く、潮風や大気汚染に強いので寺社や庭、公園に生垣などとしてよく植えられています。カイヅカイブキはそのイブキの園芸種で「貝塚伊吹」と書きますが貝塚の意味は不明です。葉は密生して鱗片状ですが、剪定しすぎると針状の葉が出る傾向があります。成長するにつれて側枝が螺旋状にねじれて主幹に巻きつくようになり狭円錐形の(ゴッホの絵に出てくる糸杉のような)独特の樹形を呈します。そのねじれ方、ひねり方が北半球(上から見て左旋回)と南半球(上から見て右旋回)で違い、北半球では旋回した先端が北方を指すというのですが如何でしょうか。果実は球形で白粉をかぶり白っぽく見えます。イブキの仲間はナシの赤星病を媒介しますので、梨の産地では嫌われます。写真は、2本の樹からなっています。



カイヅカイブキ

**ラクウショウ (ヒノキ科 花期/4月 結実期/10月)**

原産地北米やメキシコでは50m程度に達するといえます。葉は柔らかく羽状葉で秋に褐色になって落葉するところから「落羽松」といい、葉も小葉も互生します。(よく似たメタセコイアは葉が対生し、球果が小さい。p.61 参照。)また、別名ヌマスギ「沼杉」は沼地や湿地に生えることから呼ばれます。幹の周囲の土中から膝根<sup>しっこん</sup>と称する楕円形の気根が発達します。日本でも沼地に植えて、根元あたりにニョキニョキ出ている姿を見ることがあります。種子はできれば2~3cmの球形で褐色になります。池に一番近いところに大きな切り株がありますが、これはリキダマツのあった所です。



ラクウショウ



### ヒヨクヒバ (ヒノキ科 花期/4月 結実期/10月)

ヒノキに近縁のサワラの園芸品種です。サワラは直立する大木になり、建築材や木材として使われますが、ヒヨクヒバは小高木で庭木として植えられます。葉が往々黄色くなりやすく、葉先が鋭く尖り外側に開いています。枝は、糸状に長く垂れ下がるので、イトヒバの別名もあります。よく似たスイリュウヒバは、ヒノキの園芸品種で葉先はあまり尖らず開いていません。枝は糸状に長く垂れ下がります。



ヒヨクヒバ

### コウヤマキ (コウヤマキ科 花期/3～4月 結実期/翌10月)

福島県以南～九州の岩場や尾根に稀に生える日本特産種で1属1種です。高野山に多いので「高野槇」の名前がつけました。マキといってもイヌマキやラカンマキ(イヌマキ科)の仲間ではなくコウヤマキ科です。葉がイヌマキに似ていますが、コウヤマキの葉は細長く12～13cmもあります。しかも1枚の葉は2本が合着して1本のようになっています。葉を見ると、中央で凹み裏の白色の気孔溝が2本はっきりと見え、2本がくっついた様子が納得できます。球果は6.5cm位の楕円形でしばしばその先に葉がついています。庭木としてよく見かけますが山では大木となります。材は水に強く<sup>あり</sup>て朽ちにくく、船や橋梁をつくるのに使われます。県内では、鹿足郡吉賀町有飯<sup>あり</sup>の山中にコウヤマキの自生林があります。



コウヤマキ(雄花序)

### ナギ (マキ科 花期/5～6月 結実期/10～11月)

太平洋側の山地に自生しますが、神社や庭にも植えられています。ナギは「<sup>なぎ</sup>椰」と書きますが、「<sup>なぎ</sup>風」にも通じていて、平穏を祈る意味も込められています。葉が幅広なので被子植物のように見えますが、裸子植物と同じ平行脈で、何より胚珠が裸出しており、マツ、スギ、イヌマキ等と同じ裸子植物の仲間です。光沢のある葉は対生し、丈夫で細かい葉脈がたくさんあるため、なかなか引きちぎれません。そこで、センニンビキとかチカラシバ、ベンケイキラズ、ベンケイナカシなどおもしろい名前があります。引っ張っても切れないことから、昔、嫁入りの鏡の裏にナギの葉を彫刻し、夫婦の縁が切れないようにと願ったということです。秋に雌株には白い粉をかぶった1cmほどの青紫色の球果がなります。材は水に強く、家具、器具、床柱に使いました。

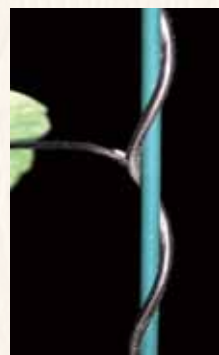


ナギ

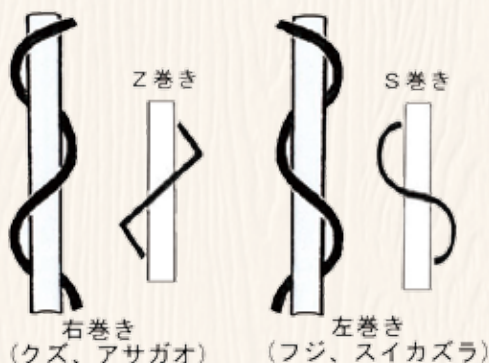
## ～右巻き、左巻き～

## コ ラ ム

「アサガオの蔓はどちらに巻くか」と問われたらどう答えるか。アサガオの蔓は支柱に巻きつく方向が決まっており、「アサガオは左巻き」というのが昔から言われていた。右写真は、アサガオの蔓の巻きを真横から撮ったものだが、これを上から見ると左に、下から見ると右に巻いているように見える。先ほどの答えは、上から見て左巻きとしたのだろう。上から見ると、下から見ると巻き方が決まり、どちらも正解だと言える。しかし、混乱を避ける意味で、統一する事も必要だ。① 動物、特に巻き貝は「右巻き」、バネは「右巻き」と統一している。② 外国ではZ巻き（右巻き）、S巻き（左巻き）という概念がある。これだと上から見ようが、下から見ようが、横から見ようが見る方向は関係ない。（右図参照）例：ロープの巻き方等（Z撚り、S撚り）①や②に合わせると、クズ、アサガオは「右巻き（Z巻き）」ということになる。そこで、最近の図鑑では、「下から上に向かって」、「ソルの伸びる方向に」、「外から見て」等と条件を付け、クズやアサガオは「右巻き」とする考えに変わった。アサガオ、クズ、ヤマフジ、ヤマノイモ、アケビ、アオツツラフジなどは「右巻き」、フジ、マツブサ、アカネ、スイカズラなどは「左巻き」となる。



アサガオの蔓



鉄筋校舎への改築/ 昭和37年(1962年)12月頃  
解体時、1-2号館中庭樹木が大切に残された様子が分かる。



2-3号館中庭にあったプールと植栽/ 昭和29年(1954年)



柳楽 茂先生/ 昭和30年(1955年) 秋

写っているメタセコイアは3年目でまだ小さい。昭和37年には10mを超えたという記録が残っている。今や久徴園入口で大きく育ち、象徴的の樹木となっている。



続いて、湿地植物があり、克昌園碑が建っています。ここには、カキツバタ、ハナショウブ、ノハナショウブ、ショウブなどが植わっています。また、久徴園側の斜面にはホオノキやアジサイがあります。

### ホオノキ（モクレン科 花期/5～7月 結実期/9～11月）

日本各地の山で高さ 30m にもなる落葉する大木です。「朴の木」。葉は 30cm にもなる大形で枝先に集まって付くので掌状に見えますが、1 枚 1 枚別々に枝に付いていてトチノキ (p.81) とは異なります。鋸歯もなく全縁です。5 月ころ咲く白い花も大きく直径 15cm があります。葉に芳香や殺菌作用があるため、飯や食物を盛って包んだり、枯朴葉の上に味噌と野菜をのせ焼いて食べたりします。岐阜県高山地方の朴葉味噌は有名です。



ホオノキ

## 丸山 巖氏のこと

丸山 巖先生は、島根県の高등학교の教鞭を執りながら、植物分類に貢献され、多くの山陰の植物を世に出されました。この「平田植物園めぐり」の中にも、丸山先生が発見、命名された植物が登場します。イズモコバイモ、オオメノマンネングサ、オッタチカンギク、インヨウチク、サンベサワアザミ等がそれです。平田植物園にも度々来園され、貴重なご意見やご指導を受けました。丸山 巖先生は、平成 11 年 3 月、惜しまれて逝去されました。丸山 巖氏のご子息、丸山 卓氏は、長らく神戸市に在住後、松江市に帰られ、平成 14～18 年 3 月まで出雲科学館でお勤めになり、平成 18 年 4 月から出雲高校の専任管理者として平田植物園の復興に尽力されました。その後、本校 23 期卒業生の松井 義巳氏に引き継がれました。

～ 丸山先生の思い出 ～ 私は、丸山先生とは数え切れないほど植物観察会に連れて行ってもらいました。当時は自家用車はなく、汽車とバスを乗り継ぎその後は数 km も歩いて山や草原に辿り着きました。先生は実に足が速かった。ある時、三瓶山の麓での観察会の時、私たちより遙か先に行って珍しい植物を『こら こら これ見てみいや』と指されます。それは見事なサンベサワアザミでした。また、歩きながらの『山高さが故に貴からずや』が口癖でした。外観が立派でも、内容が伴わねば優れているとは言えない、との意味ですが、先生はこれを、珍しい植物は高い山より低い山野に多い、と言いたかったのでしょうか。先生の自宅（現奥出雲町横田）の庭には、「彩紫花苑」と名付けて県内で採集された植物が整然と植えてあり、私も何回となく訪問して花や木を観察させてもらった記憶が昨日のように蘇ります。（青木充之）



サンベサワアザミ

## アジサイ (アジサイ科 花期/6～7月)

石垣の上に沿ってアジサイが横一列に植えられていました。柳楽茂氏の植栽によるものです。アジサイは普通「紫陽花」と書きますが、これは本来のアジサイではありません。「紫陽花」はライラックだとする説が有力です。そもその間違いは「倭名類聚抄」を著した源順が、唐の白楽天の詩の中にあった紫陽花にアジサイを当てたことに寄ります。現在、中国ではアジサイは「綉球花」を用いているそうです。



ヤマアジサイ

牧野富太郎によるとアジサイのアジはあ<sup>さ</sup>づ<sup>み</sup>で集まるの意、サイは真藍<sup>さあい</sup>という意でその花が藍色で集団となる様をいうといっています。旧学名を *Hydrangea macrophylla* Seringe var. *otaksa* Makino といい、macrophylla は大葉の、otaksa は日本の植物を研究したシーボルトの愛人楠本お滝を "お滝さん" と呼んでいたことに因んでつけられた名前だそうです。牧野富太郎は「神聖な学名に自分の情婦の名を付けるとはけしからん」と憤慨されたといえます。しかし、その牧野博士自身もササの新種に愛妻(寿衛子)の名を付して *Sasa Suekoana* (スエコザサ) とされたといえますから、こういうことはよくあることなのです。

さて、アジサイの花をよく見てみましょう。小さな花がたくさん集まって半球形の毬形をしています。アジサイの原型ともいべきものは、すべての花がまだ変化しないで生殖能力をもっているコアジサイ(山地にある)です。さらに縁の花の萼片だけがまるで花卉(装飾花、飾り花といえます)のように変化してヤマアジサイ、ガクアジサイができたと考えられています。そして普通のアジサイはすべての花にこの変化が起こったものなのです。1つずつの花をよく見ると、4~5枚の大きな萼片の中心に小さいながらちゃんと花卉があり雄しべ、雌しべもありますが生殖能力は失なっています。ではどうして増やしたかという、挿し木や取り木で人の手によって全国に広めたものです。ここには斑入りのアジサイもあります。日本のアジサイが中国を経由して1789年にヨーロッパに渡り、交配を繰り返して多様なアジサイの品種が作出されました。これらをセイヨウアジサイ(ハイランジア)と呼び、日本へ逆輸入され栽培されるようになりました。萼片にフリルのあるシュガーホワイต์や縁が白くなった万華鏡などの品種が知られています。

### 紫陽花やはなだにかはるきのふけふ (正岡子規)

子規の歌のようにアジサイは花色が次々と変化するので「七変化」の別名もあるくらいです。どうして花の色が変わるかは、武田幸作著「アジサイはなぜ七色に変わるのか?」(PHP研究所発行)に詳しく書かれていますので参考にして下さい。内容を要約しますと、今までは土壌の酸性度によるといわれていました。しかし、よく調べられたところ、土壌中のアルミニウムイオンの多少がアジサイの色を決めているというのです。アジサイの咲き始めは花卉にも葉緑素が含まれていて緑色をしています。やがて葉緑素が分解してアントシアニンという赤色系色素ができ、土壌中にアルミニウムイオンが存在すると花色は青色を呈します。咲き終わりに近づく花卉中に有機酸が蓄積して酸性になると青色から赤紫色に、そしてアントシアニンも減少して老廃物が貯まると茶褐色になって枯れていくというわけです。



|         |       |         |            |
|---------|-------|---------|------------|
| カキツバタ   | (アヤメ科 | 花期/5～6月 | 結実期/9～11月) |
| アヤメ     | (アヤメ科 | 花期/5～7月 | 結実期/9～11月) |
| ノハナショウブ | (アヤメ科 | 花期/6～7月 | 結実期/9～11月) |



カキツバタ



アヤメ



ノハナショウブ

アヤメ科のこの3種は、「いずれアヤメか、カキツバタ」といって昔から区別が難しいとされています。そこで、これらの区別点を4つの点から見てみましょう。

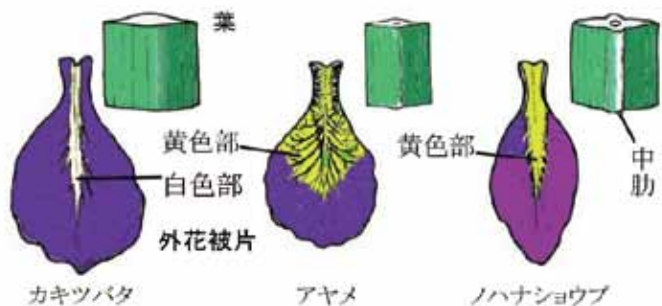
◎ 区別点1：生育場所・・・まず、最も水気を好み水辺や池中に生えるのがカキツバタ、続いて水辺から湿原に生えるのがノハナショウブ、水辺を嫌い乾燥した土地を好むのがアヤメ、従ってアヤメは畑か庭に植えてあります。

◎ 区別点2：花・・・花が咲いていたら区別は容易です。最も大きな紫色の外花被片の付け根を見てみましょう。カキツバタは白色、アヤメは黄色地に編目文様(文目)があり、ノハナショウブは黄色の筋があります。花の大きさも若干違います。概してアヤメが一番小さく、次がノハナショウブ、最も大きく見えるのがカキツバタです。花色も少しずつ違います。花の写真や下図でも比べてみてください。

◎ 区別点3：花期・・・3種の花の咲く時期も若干異なります。最も早く咲くのがカキツバタで4月下旬から6月、次がアヤメで5月中旬から7月に、最も遅く咲くのが、ノハナショウブで6月から7月です。

◎ 区別点4：葉・・・花のない時はどうして区別したら良いのか、それは葉を見るしかありません。葉の幅と葉の真ん中の膨らみ＝中肋に違いがあります。カキツバタは葉幅が最も広くて(最大幅2~3cm)、中肋がはっきりしない。アヤメは最も葉幅が狭く(同1cm以下)、中肋はわずかにあり、ノハナショウブは葉幅が広く(同1~1.5cm)、中肋は最も顕著という点です。

カキツバタは三瓶山の姫逃池、ノハナショウブは赤名湿原などで見られます。ハナショウブはノハナショウブを改良したもので、江戸時代に盛んに園芸品種が作出され、多種多様な栽培品種があります。全国に「菖蒲園」がありますが、これは主としてハナショウブの品種を植えたものです。



※その他のアヤメ属 (Iris) について触れておきましょう。中国原産で古くから観賞用に植えられているイチハツ (4～5月) は、下へ垂れ下がる外花被片 (藤色) の基部に白いとさか状のひだがあります。同じくひだのある園芸種のジャーマンアイリス (5～6月) は多彩な色があって豪華な感じの花です。庭や竹藪によく群生するシャガは、やはり中国原産で縁にギザギザのある白っぽい花びらに紫斑があってとさか状の突起があり、やや小形の花です。カキツバタより少し遅れて咲く黄色い花のキショウブ (5～6月) はヨーロッパ原産で明治時代に輸入され、今はあちこちの水辺に自生状態になっています。また、園芸種の Iris がたくさん外国から入ってきています。切り花によく使われる球根系のダッチアイリスやイングリッシュアイリスなどアイリス (イリス) と称する園芸種が多数あります。これらは園芸図鑑で確認して下さい。ノハナショウブは万葉集では「はなかつみ」です。

をみなえし咲く沢に生ふる花かつみかつても知らぬ恋もするかも (「万葉集」巻4-675 中臣女郎)  
から衣きつつなれにし妻しあればはるばる来ぬる旅をしぞ思ふ

(在原業平、「伊勢物語」の中で「かきつばた」の5文字を折り句にして詠んだ歌)

### ショウブ (ショウブ科 花期/5～7月)

ショウブとハナショウブは分類上は全く異なる植物です。ショウブはショウブ科であり、ハナショウブはアヤメ科です。ハナショウブは鑑賞するように見事な花がてっぺんに咲きます。ショウブには、地味な小さな花がつきます。ツクシやミズバショウの花の中心に立つ緑色部分にも似ています。5月の節句に飾ったり、ショウブ湯に入れるので昔から馴染み深い植物でした。ショウブ湯はこれでないとダメです。すぐ隣にあるハナショウブでは香りはありません。葉を少しちぎって臭いを嗅ぐと独特の香りが



ショウブ

します。また、ちょっと紛らわしいのですが、山の谷川の石の縁などにショウブによく似た植物が生えています。こちらは、セキショウ (石昌) といいます。やはり良い香りがしますが、ショウブとの区別点は① 全体に小さい ② 花がショウブは葉の途中につくのに対して、セキショウ (下の写真) は葉の先につく (花の上にあるのは苞) ③ 葉に中肋がない などによります。

我入れば暫し菖蒲湯あふれやまず (高浜虚子)

ショウキズイセン  
(ヒガンバナ科)



シロバナサクラタデ  
(タデ科)



セキショウ  
(ショウブ科)





## 竹笹園について

2号館から3号館までの東側（久徴園寄り）にタケやササがたくさん植えてあります。これは、そのほとんどを柳楽 茂氏がここにまとめて植栽されたもので、今から25年位前にタケの権威である室井 緯博士が視察に来られたこともある山陰では有数の竹笹園であって平田植物園共々誇れる存在です。

### ハチク（イネ科）

春には筍がモウソウチク、ハチク、マダケの順に生えますが、この仲間は稈<sup>かん</sup>から出る枝が通常2本です。モウソウチクは稈の節の隆起線が1本なので、区別しやすいのですが、同じ2本のハチクとマダケは筍の皮（稈鞘）以外では区別しにくいこともあります。見た目にはハチクは稈の色が白緑で葉が少し小さいです。ハチクにはさまざまな品種がありますが、稈が生えて数年経つと黒になるクロチクが庭園によく利用されています。園にはハチクとともに稈に紫褐色の雲紋が現れるウンモンチクが植えられています。



ハチク

.....  
a 稈 / 竹の地上部の茎に相当する部分。



タケノコののがみ成分はホモゲンチジン酸といいますが、これは水に溶けやすい性質があるので煮て水にさらしておくと取れます。タケノコは採れたてが美味しく、日数が立つと甘味成分が減少し3~4日目には半減します。糠<sup>ぬか</sup>で煮ると美味しくなるのは糠の甘味成分がタケノコに移るからだということです。ハチクの稈は高さ10m、径3~10cmになり、表面が粉白色を帯びます。ハチクは稈の節の隆起は2本、そこから2本の枝が出ます。枝の断面（枝の第1節間）を見ると中が詰まっています（中実といえます）。ハチク（節は2本）は中実、マダケ（節は2本）は中空です。モウソウチクやハチク、マダケについて検索してみましょう。

- A1 節は1本からなり、枝の第1節間の中実・・・・・・・・・・モウソウチク
- A2 節は2本からなる。
  - B1 枝の第1節間は中実・・・・・・・・・・・・・・・・ハチク
  - B2 枝の第1節間は中空・・・・・・・・・・・・・・・・マダケ

わが屋戸のいささ群竹吹く風の音のかそけきこのゆうべかも（「万葉集」巻19-4291 大伴家持）

## ナリヒラダケ (イネ科)

勇壮なタケの仲間ではあるが小型で節なども女性的であるとして、容姿端麗で頭脳明晰な万葉歌人である在原業平に由来する「業平竹」として牧野富太郎が命名しています。竹の皮(稗鞘<sup>かんしやう</sup>)が成長後にすぐには脱落しないでしばらく残っており、節からの枝の数がマダケ等は通常2本に対し、3本かそれ以上出て、短いのを特徴とします。県内では山間部の川の土手等に群生するなど点々と見られます。タケササ園の一番南に植えてありますが、容姿端麗に見えるでしょうか。

## リュウキュウチク (イネ科)

「琉球竹」で沖縄諸島に多く、西日本で栽培されています。マダケの仲間です。生垣や庭園用の材料として利用される他、以前は屋根葺き材料としても利用されていたようです。京都御苑などでも生垣として利用されています。

## ヤダケ (イネ科)

稈は非常に硬く、節が盛り上がり、長さはササ類としては3～4mと長いことなど、武道具の矢として使うための理想的な性質をもっています。本州、四国、九州に見られますが、矢をつくるため各地で栽培され、自生地は不明です。県内でもいたるところに生育しています。他の特徴として稗鞘が非常に長く上向きの長毛が密生しているので触るととてもザラザラしています。園でこの特徴を学んでもらうと身近なところに生育しているのが分かるようになり、中世や近代とつながる歴史を感じることができるのではないのでしょうか。



ナリヒラダケ



リュウキュウチク



ヤダケ



## ネザサ（イネ科）

タケのように大きくなりますが、稈鞘が脱落しないササの仲間です。いたるところに生え、いったんはびこると地下茎が広がっているので刈り取っても小さな苗状となって残り、いつの間にか大きく成長して密生する非常にやっかいな植物です。これと同様に河原等で群生するメダケがあります。これもササ類でよく似ていますが、枝がメダケでは成長すると3~7本の枝を広げて出しますが、ネザサはやや斜上します。特に異なるのは葉鞘<sup>a</sup>の上部がメダケでは斜めになっていますが、ネザサでは水平になっています。子供の頃つくった幣串やジャノヒゲの紫の実の竹鉄砲には、ネザサより太いメダケを使いました。また県内のネザサは稈の節に毛を密生するものが多くゴキタケと呼ばれていて、道端や山道でよく見かけます。



ネザサ

.....  
a 葉鞘 / イネ科に見られる葉の基部にある茎を包む部分。

## オカメザサ（イネ科）

1~2mと小さいので、ササと間違えやすいのですが、稈鞘がすぐに脱落するのでタケの仲間になります。関東以西に広く栽培されているのですが、自生地は不明です。庭園での根締めや生垣などによく使われており、各地の恵比寿神社の西の市ではこの竹に熊手や小判、おかめひょっとこのお面等をつけたものが福を呼ぶ縁起物として売られています。これがオカメザサの名前の由来でもあります。



オカメザサ

## トウチク（イネ科）

南アジア原産なので「唐竹」と名づけられています。節間<sup>せつかん</sup>が60~80cmと長く、節は若いときには長毛が密生します。ナリヒラダケと同様に竹の皮（稈鞘）が成長後もすぐには脱落せずしばらく残っています。また、節からの枝は3~5本ですが4本以上のことが多いように思います。中型のタケで竹笹園では4~5mになっていますが、これはダイミョウチクの名で切り詰められて生垣によく使われているのでこちらの方を目にする機会が多くあります。このときは枝がより多く段状に見られます。また、葉に白や黄色の縦じまのあるものをスズコナリヒラといい、これも生垣にされています。こちらも竹笹園に植えられています。



トウチク

## ～竹と笹はどこが違うのか？～

**コラム** 「竹は大きく、笹は小さい」とよくいわれるが、オカメザザはササといいながらタケに分類され、大きさはササのように小さい。また、メダケやヤダケは、タケと名がついているが、ササに分類され大きさも中程度、後述のインヨウチクは、タケとササの両面の特徴を持つという具合に竹と笹は区別が曖昧である。では、竹と笹はどう違うのか。①タケは、稈鞘（竹の皮）が早く落ちる、ササは、稈（竹、笹の中空の茎）が完成しても稈鞘は残ってついたままである。②ルーペで葉脈を見ると、タケは網目（格子）状にササは平行に見える、などの違いがあるとされている。いずれにしても、竹と笹は分類上は近縁のものということである。

### ベニホウオウチク（イネ科）

東南アジア原産のバンブーの仲間は地下茎が短くまとまって稈が伸び、株立ち状になる異国情緒あふれる仲間です。この仲間にはホウライチクがあり、九州南部では護岸工事が山の境界を示すものとして植えられていることがあります。これの変種で全体が小さいホウオウチクがあり庭園等に植えられています。園ではこれの稈が黄色で緑の縦縞が入り、葉に白の主脈の平行の斑が入るベニホウオウチクという品種が植栽されています。このホウオウチクですが、さらに小さいものが八束郡玉湯町布志名（現 松江市玉湯町布志名）で見つかりコマチダケとされています。これは稈の穴が中実であることを特徴とし、品種名も無腔の（*solida*）となっています。園のものは中空になっているのが剪定された稈を見ると分かると思います。



ベニホウオウチク

### インヨウチク（イネ科）

やや小型のタケの仲間とされ、1941年島根と鳥取県境の安来市伯太町比婆山で発見されたもので、高さ4mになる男性的な大きさと、小さなササに見られる大きな葉がつくことを女性的と見立てて「陰陽竹」と名づけられました。これの所属は長く確定されなかったようですが、出雲高校に植栽されたものが1970年に開花し、本格的な研究のもととなったようです。マダケ属としたものもありますが、現在の所属は新たにインヨウチク属を立てて *Hibanobambusa tranquillans* (Koidz.) Maruyama. et H.Okamura とされています。これはマダケ属とササ属との属間雑種ではないかとも考えられている不思議な植物です。現在は県内外各地に栽培されています。島根県を代表する竹であり県の竹に認定されています。竹笹園の上の法面に繁茂しています。



インヨウチク





竹笹園の上は、秋になるとコハウチワカエデ、イロハモミジ、ヤマモミジ、ハゼノキなど様々な紅葉を見ることができます。二階の渡り廊下から見る紅葉も見事です。

### コハウチワカエデ（ムクロジ科 花期/5～6月 結実期/6～9月）

ミズナラやブナの分布する冷温帯林に生え、高さ15m、直径60cmになる落葉樹です。葉は5～8cmで5～11裂する掌状で、周囲には鋸歯<sup>a</sup>があります。よく似たハウチワカエデも同じような所から少し標高の高い所に生えますが、コハウチワカエデは①葉が小型、②切れ込みがやや深い、③葉柄がより長い等の点で区別されます。ハウチワカエデとは、天狗が持つ鳥の羽で作った扇に似ているというので「羽団扇楓」といいます。いずれも見事な紅葉が見られます。



コハウチワカエデ

.....  
a 鋸歯/ 葉や花卉の縁にあるノコギリ状のぎざぎざの切れ込み。

### ヤマボウシ(ミズキ科)

### タイサンボク(モクレン科)

### タマリユウ(キジカクシ科)



## プール跡地

元々、2～3号館中庭にはプール（昭和11年7月設置。当時は出雲市最初のプール）があり、昭和46年度までは水泳大会が開かれていました。昭和51年にプールの寿命と3号館が改築されるのに伴って撤去され、セメントを敷き詰めた中庭になりました。その後、平成18年度の校舎新築により今の中庭兼集会場になりました。現在は、ベンチが置かれランチスペースとしても活用され、久徴祭の準備や会場としても使われています。ここには、コブシやクスノキ、ヤマボウシ、バラ、タマリユがあります。



昭和40年(1965年)頃の水泳大会の様子



現在の中庭/平成31年(2019年)

### コブシ（モクレン科 花期/3～4月 結実期/10月～）

千 昌夫が歌う「こぶし咲く北国の春・・・」の辛夷はコブシでしょうかキタコブシでしょうか。サクラに先がけて咲く早春の花です。東北地方では、この花が山に咲くと田植えの準備にとりかかるので、タウチザクラとか、タネマキザクラ、ナワシロザクラなどの方言で呼ばれるのだそうです。高さ15mにもなるモクレンの仲間の落葉高木で、3～4月に葉が出る前に6枚の白い花被片からなる花を開き、その付け根に1枚の緑の葉をつけます。中国地方の山地に咲くコブシに似た花はタムシバといい、別の種類で花の下に1枚の葉がありません。葉の裏側が白っぽく、葉を噛むと甘く香りが良いというのでカムシバといい、これが転訛してタムシバになりました。山で出会ったら葉を噛んでみて下さい。コブシは、果実が握り拳に似ている事によります。果実は袋果が集まった集合果で裂開すると赤い種子が糸の先に垂れ下がります。ここにあるコブシは葉の両面が緑で、花がたくさんつく傾向があります。種小名もkobusです。シデコブシ(3～4月)は花弁が細長く、枚数が多く12～18枚もあります。花びらがしめ縄や弊串のシデ(四手)に似るので「四手辛夷」といいます。



コブシ

一弁の疵つき開く辛夷かな（高野素十）



**ヤツデ**（ウコギ科 花期/10～11月 結実期/翌年）

暖地の沿海地に自生します。といっても、かなりの山間地にもあります。かつて家があったであろうという山の中でもよく見られ、日本人の生活と密接に繋がっているようです。葉が非常に大きく、成長が速いので他の植物には迷惑という存在です。ヤツデは「八手」で、7～9に裂けた葉を8本指の手に例えたものです。その大きな掌状の葉から「テングノウチワ」の別名もつけられています。学名を *Fatsia japonica* といいます。属名の *Fatsia*（ハチャ）は日本語の「八」のなまりから来ています。漢名は「八角金盤」といいます。果実は球形で、翌春黒熟し、鈴なりになってうなだれるようになります。



ヤツデの花

黄昏る露路に明るき花八ツ手（渡辺幸子）

**チョウジガマズミ**（レンプクソウ科 花期4～5月 結実期/6～10月）

中国地方以南の山地に稀に分布するガマズミの仲間です。4～5月、20～50個の花を半球形に咲かせます。一つの花は淡紅色～白色の先が5裂した筒型で横から見ると丁字状なので「丁字莢蒾（チョウジガマズミ）」といいます。良い香りがして美しい花です。かつては、立久恵峡の山地に自生していましたが、今は存在が確認されていません。



チョウジガマズミ

**ハコネウツギ**（スイカズラ科 花期/5～6月 結実期/11月）

山陰地方には自生地はなく、庭や公園に栽培される低木です。ハコネウツギといいますが、箱根には少なく太平洋側の海岸部の斜面に自生しています。葉は幅広で厚く光沢があって瑞々しく、5～6月に咲く筒状の花は最初は白く次第に赤色に変化して綺麗です。ニシキウツギも花が白から紅色に変わりますが、葉が細長く、花筒もなだらかに先が広がる等、ハコネウツギとは少し異なります。日本海側にはタニウツギ「谷空木」が分布しています。タニウツギは県内の山地に普通に見られます。（p.15 参照）ウツギと名のつく植物はたくさんありますが、そのうち、ツクバネウツギ、コツクバネウツギについては p.37 を参照して下さい。ウツギの話は、「出雲市内樹木ウォッチング」（錦織俊二著）に詳しく書かれていますので参考にされるとよいでしょう。

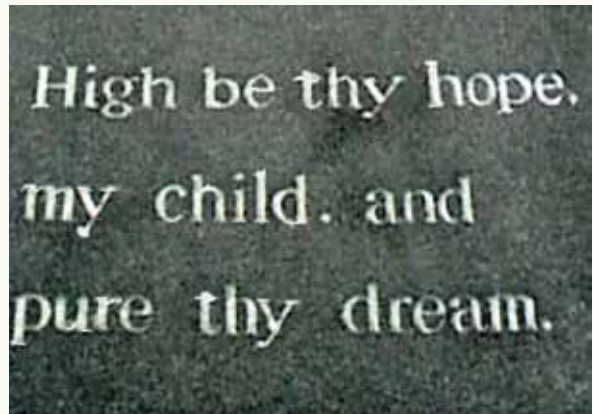


ハコネウツギ

## 吉田校長の碑について

吉田元吉 先生は昭和 25 年から昭和 40 年の 16 年間にわたって、出雲高校の校長をなさいました。吉田校長は、アメリカ のイートン校にある下記の英文を示して、生徒達に高邁にして清冽な校風を些かでも持って欲しいと願っておられました。昭和 54 年に、当時の今岡登校長が吉田校長を記念して、黒御影石にこの英文を刻印し、アフロディテの誕生のレリーフをあしらった記念碑を建立しました。

「High be thy hope, my child, and pure thy dream」(希望は高く、夢は清らかに)



昭和56年(1981年)頃の玄関周辺



昭和62年(1987年)頃の玄関前



平成元年(1990年)の2-3号館中庭



平成元年(1990年)の図書館前(現在の第一体育館周辺)



ハリエンジュ (マメ科 花期/5～6月 結実期/7～8月)

正門から北門までのクロマツの間に生えています。別名ニセアカシアといい、北米原産で明治初期に渡来したマメ科植物です。根には根粒菌が共生し、窒素肥料を固定するので、痩せ地でも旺盛に育ちます。5～6月頃、シラフジに似た白色の総状花序(フジ、ギボウシ、ヒヤシンスの花のように、長い中軸に柄のある花が列をなして下から咲き上がる花序。)をぶら下げ、甘い芳香がします。葉の付け根には鋭い棘があり、9月頃に豆果がなります。北海道のアカシアはこの木です。海岸の防風林としてマツを植える際、風が強いので苗木が吹き飛ばされてしまいます。そのため、防風林を作るための防風樹として植えることがあります。江津の浅利あたりには、9号線沿いやJR線路沿いにたくさんあります。初夏にこのあたりを通りかかると良い香りが漂ってきます。しかし、非常に繁殖力が強く、たちまち林をつくります。以前は、学校周辺のマツ林の中で大木になり、点々と生えていました。



ニセアカシアの花

ヒイラギ (モクセイ科 花期/11～12月 結実期/翌6～7月)

高さ4～8mになる常緑の小高木で庭木として植えられています。初冬に白い小さな花を葉腋に数個付け木犀<sup>もくせい</sup>の良い香りがします。ヒイラギ「柊」は若木の葉に2～5対の鋭い針状の鋸歯がありオニツキとかオニノメツキなどといって節分に鬼を追っ払う魔よけにする地方があります。しかし、老木になると刺はなくなり、全縁で丸くなり別種かと紛う程になります。このことを、若いときは刺がありますが、しだいに歳を取るにつれて刺が取れ人格円満になるという人生に比喻して「ヒイラギ人生」と称し、人生訓にしている人もいます。



ヒイラギ



また、ヒイラギモクセイはヒイラギとギンモクセイの雑種と考えられており(p.139 参照)、両者の中間形で針状の鋸歯があり触ると痛く、よく生垣にされているモクセイ壁の材料です。10月、少し芳香のある白色花が咲きます。クリスマスに使うセイヨウヒイラギ(5～6月、9～12月)は、ヨーロッパ原産のモチノキ科の別種です。葉も互生する点でモクセイ科のヒイラギ(対生)と区別できます。(p.59 参照)

**キョウチクトウ（キョウチクトウ科 花期/6～9月）**

昇降口を出た正面にあります。インド原産で江戸時代に渡来した帰化植物で、高さ5m以下の株立ちをする常緑小高木です。葉は混んでいて分かりにくいですが、3枚の輪生葉です。夏、赤、白、ピンクなどの花が長期間咲いて鮮やかです。葉が竹に花が桃に似ているので「夾竹桃」といいます。有毒植物で、人が中毒を起こしたり、牛に誤って食べさせ死亡した例があります。公害に強いことから都会や工場の近くなどにも植えられます。

夾竹桃日暮は街のよごれどき（福永耕二）



キョウチクトウ

**ブラシノキ（フトモモ科 花期/6～7月）**

昇降口前にブラシノキがあります。オーストラリア原産の庭園樹で、6～7月にビン洗いのブラシに似た濃赤色の穂状花序をつけるので、ブラシノキという名前がついています。よく見ると、無数の赤い雄しべが放射状に取り巻いています。学名の Callistemon は美しい雄しべの意味です。ブラシノキよりも葉が広くてイヌマキの葉に似たマキバブラシノキは「金宝樹」という別名もあり、共に切り花にされます。



ブラシノキの花

**ヤマモモ（ヤマモモ科 花期/3～4月 結実期/6～7月）**

暖地の山地で大木になる木です。雌雄異株で、雌株には夏に径1～2cmで赤色球形のちょっと香りの強いおいしい実ができます。この木には実がなるので雌株です。雄株は3～4号館中庭にあり、そこからも花粉を飛ばしています。旧斐川町の町の木になっていて、町内の街路樹として随所に植えられています。（p.23 コラム参照）

やまももや今年の梅雨もをはりなる（三山）



ヤマモモの実

ここで校舎間Aコースは終了です。どうもご苦労様でした。



## 随想

### 「平田植物園・久徴園 - 次なる百年の森づくり」

「久徴園整備原案作成委員会」

委員長 板倉 宏文

#### ・はじめに

平成 29 年 5 月、池淵久徴会会長から久徴園のことについて話し合いをするから参加してくれとの電話がありました。彼とは同じクラスであったので、同級会の案内程度に受け止め、久徴園への懐かしさからも二つ返事で了承し出雲高校へ出かけました。

その会合は「平田植物園・久徴園管理委員会」と称し、校長、生物部 OB 先輩等 15 名の委員で構成され、委員長は久徴会会長で、その名簿の中に私の名前もありました。委員会の目的・規定、予算、久徴園の管理状況などの説明が進むにつれて妙な予感がしてきましたが、開校百周年の記念事業として久徴園整備を行いたく、については委員会として整備計画案を纏めたいがという提案の時に予感は的中しました。その為に 7 名による「原案作成委員会」が設置され、10 か月後の平成 30 年 3 月までに原案を纏め管理委員会に報告することになり委員長に私が選出されました。

御引き受けした以上はベストを尽くさねばなりません。メンバー 7 名で具体的な対応策を提案するに当たっては課題把握が必然であり、現地を丁寧に視察し目線合わせの議論をしました。まず、久徴園はどこまでの範囲か？ということでした。意外にも平田植物園と久徴園の認識がそれぞれ異なっており次の様に統一しました。「久徴園は平田植物園も含む丘陵」であり「平田植物園は学校植物園」であることからこの整備計画範囲は久徴園全体とキャンパス一部の植栽部分を含むこととしました。

#### ・現地調査

久徴園とキャンパス内を見て回りました。久徴園に登るのは半世紀ぶりでした。スダジイの森は相変わらず鬱蒼として暗く変わりなかったのですが、山頂広場にはいささか驚きました。かつてはコムラサキも飛び交い、応援歌の練習もさせられた見晴らしのいい草原が林となり、出雲平野や北山を一望に見渡せた視界が樹木の生長により妨げられていました。同様にキャンパス内においても大樹となった木々が校舎を覆いかぶさるようになっていたところがありました。このようなことから、眺望の確保と快適で開放的な空間の継続的維持の必要性を強く感じました。

#### ・生徒が使ってなんぼ

活用の主体はもちろん生徒なので、学校事務局に現在の生徒利用状況について聞き取りをお願いしました。これを参考に自然探訪だけでなく、万葉集等の文学の世界、音・美の世界も含め全面的な情操の場として活用承継できないかという思いを持って考えてみることにしました。また、久徴園の素晴らしさは照葉樹林に覆われた森とともに、平田駒太郎先生により見本植物が植えられた学校植物園の平田植物園の存在です。私も高校生の時は気にも留めなかったのですが、社会人になり自然保護活動に携わるようになって、改めてその類い希な価値に気づきました。植物の名前にこだわることはありませんが、まず生徒のみなさんに知ってもらうことが将来に向かっての保全にも繋がっていくことから、これへの工夫が必要ではないかと思いました。

## ・百年の森づくり

久徴園は平成 19 年に校舎改築に合わせ大々的な環境整備がなされています。その時の綺麗になった様子は冊子の写真から見て取れます。10 年経った現地を巡回したところ、思いの外、老朽化や破損箇所が見受けられ、その姿からこまめな手入れの重要性を感じました。よってこの度、新たなものを作るのではなく、補修を行い、できるだけ 10 年前の姿に近づけることとしました。このことから今回の整備原案として提案することは施設の新設整備より将来に渡っての「管理」に重きを置くべきとし、テーマを「次なる百年の森づくり」としました。

あるものを維持していくことは大変なことです。将来に向けて、管理を具体的に進めていくためには物差しと道具が必要です。このために、どこを、何を、どのように、誰が、いつ、予算、に視点を置き、その施工内容と通常管理、ボランティア協力、業者委託、見積もり経費などの具体的な項目を当てはめ、委員全員で 1 項目ごとに見比べ協議を重ね優先順位を整理した作業票（マトリックス）を作成しました。これにより客観的に選択ができる上、毎年の進捗状況も把握できるので進行管理に役立っていくと思います。

このような内容をより具体的に報告書に取り纏め、平成 30 年 3 月「平田植物園・久徴園管理委員会」に提出いたしました。百周年事業は限られた予算での対応になると思いますが、久徴園は構わないでそっとしておく森では無く、継続的に手を入れなければならない自然です。それにはより多くの人の協力が必要であり、趣旨に賛同をいただきボランティア整備に参加される生徒さんや関係者の方々とはとても頼もしい存在です。

また、整備の一環として「平田植物園めぐり」の新訂とパンフレット作成、平田植物園の植物名札等の手入れにつきましては、青木充之先生、柳浦正夫先生に大変な御尽力をいただきました。

百周年を機として、次なる「百年の森づくり」がより多くの皆さんの関わりによって繋がっていくことを願います。

### 【平田植物園・久徴園管理委員会】

#### ・委員長

久徴会会長

#### ・委員

学校長 教頭 事務長 平田植物園選任管理者 PTA 会長  
久徴会事務局長 生物班 OB 会会長 理科（生物）代表  
学識経験者

### 【原案作成委員会】

#### ・生物班 OB 会

田中和彦（22 期）、板倉宏文（22 期）、岩崎知久（23 期）、  
松井義巳（23 期）、

#### ・学校関係者

柳楽 衛（事務長 32 期）、柳浦正夫（理科（生物）代表）  
青木博志（平田植物園選任管理者 53 期）



竹田 茂・画